

## サルトルの想像論における心的アナログンについて

小 熊 正 久

(山形大学名誉教授)

## 序論

サルトル (1905-1960) は『イマジネール』<sup>1</sup>において、通常われわれが「想像する」と呼ぶ意識や「画像を見る」と呼ぶ意識の在り方の分析を行っている。たとえば、前者は眼の前に富士山がない状況で富士山を想像する場合、後者は富士山の絵や写真を見る場合などである。彼は、それらはいずれも「イメージ image」に関わると考えるが、ある箇所では、その「イメージ」について次のように述べている。ここで使われている幾つかの表現をみながら本稿の主題を説明しよう。

したがってわれわれは、イメージとは、不在ないし非在の対象をその形体性において目指す作用 (acte) であると言っておくことにしよう。そのさい、そのものとして与えられるのではなく目指された対象の《類似的代理物 *représentant analogique*》という資格で与えられる物的ないし心的内容を介してその対象を目指すことになる (f46/j72)。

最初に「不在ないし非在の対象」とは、上の例で言えば眼の前にないが想像された富士山のことである<sup>2</sup>。つぎに、「イメージ」という語は、何ら

<sup>1</sup> Jean-Paul Sartre, *L'Imaginaire: Psychologie phénoménologique de l'imagination* (1940). 日本語では『想像的なもの—想像作用の現象学的心理学』である。同書からの引用は、フランス語原文では略号 f, 邦訳 (講談社学術文庫) では略号 j ならびに頁数とともに表示する。そのさい、訳は多くの場合同訳に従ったが、変更した部分もある。そのほか本論で参照する文献については、本稿末尾の「参考文献」を参照されたい。引用、参照の際、〔 〕内は本論筆者による補足であり、原文の強調 (イタリック) は傍点で表し、本稿筆者による強調は下線で表す。

<sup>2</sup> 正確に言えば、富士山の例では、他の場所には存在するがここには存在しないという意味で「不在」の対象と

かの「像」の意味で使われることが多い語であるが、上の箇所では「作用」であると明言されているので「想像作用」の意味で理解するのが適切であろう。ただし、同書でも通常の「像」に近い意味で使われていると思われる箇所も多くあるが、そのような箇所でもわれわれはサルトルの考えに従って「想像作用における現れ」という意味で理解することとする<sup>3</sup>。

また上の文から、目指される対象の「類似的代理物」ないし「アナログン」<sup>4</sup>となりうるものは「物的内容」と「心的内容」に区別されることがわかる。それを表す名称で「想像」の種類を分ければ、「物的想像」と「心的想像」に分かれる<sup>5</sup>。

さて、サルトルは、フッサールにならって、対象へ向かう意識の特性である「志向性」をもつ典

なる。第1節の3)を参照。

<sup>3</sup> そこで、本稿における訳語としては「想像作用」を意味する場合には「想像」と、「想像における現れ」を意味する場合には「想像的現れ」と訳す。この区別がないと、「イメージ」の語が「意識の中の画像」のように理解される可能性があるからである。この理解を拒否するサルトルの論拠は、本稿第1節1)でみることにする。また、*imagination* は「想像作用」と訳す。サルトルは、同書以前に、*L'Imagination* (1936) ——『想像作用』——を著しており、これは、デカルトからヒューム、ベルグソン、アランなどの「想像作用」についての思想を扱い、その研究にはフッサールの「現象学的方法」が必要であるという考えを呈示している。サルトルは同書においても、フッサールの考えに従って、つぎのように述べていた。「したがって、想像の作用 (*l'acte d'imagination*) において意識は直接にビエールに関係するのであって、意識においてあるような似像という媒介物によるのではない」(p. 124)。

<sup>4</sup> サルトルは「類似的代理物」のほかに同じ意味で「アナログン *analogon*」(類似物)の語も使う。*analogon* ないし *analogique* の訳語を「類似(的)」としたが、この語は広い意味で使われており、とりわけ「心的想像」の場合には、第3節でみるとおり、二つの形の「類似」の意味ではなく、「構造的類似」や「対応」といった意味で理解するのが適切だと思われる。

<sup>5</sup> それぞれ *image physique*, *image mentale* という語である。また、それぞれにおける「アナログン」は「物的アナログン」、「心的アナログン」と呼ばれる。

型的な意識作用を、「知覚」、「知」、「想像」という三つの典型的なタイプに分けて、相互に比較しながらそれぞれの本質を分析し、とくに「想像」における「類似的代理物」の在り方を分析している。

ところで、サルトルは同書の冒頭付近で、「想像」に関してわれわれが陥りやすい「内在性の錯覚」という謬見の特徴を説明している。それは、大略的に言えば、心的想像イマージュに関して、絵画のようなものが意識に内在し、このことによって想像が成立することの説明がなされると考える誤謬である。

さて、これを念頭において後に導入される「心的アナログン」の概念をみると、このような概念の導入は、先に斥けたはずの「内在性の錯覚」に陥っているかのようにもみえる。たとえば、同書について次のような批判的な見解もみられる。

第二の難点は、代理的類似物と想像を同一視するサルトルの傾向である。サルトルは後者がある種の物のような存在体として扱う。これは、もちろん、想像は関係であって物ではないという彼の一貫した主張に反するものである。私は、サルトルの混同は彼自身が呈示した〔…〕扱いかからも明らかであると思う<sup>6</sup>。

しかし、同書におけるサルトルの「心的アナログン」の説明を追っていくと、それによって「内在性の錯覚」において想定される絵画のようなものが考えられているのではなく、「心的想像（イマージュ）」における契機として分析されており、また、「心的アナログン」についてそうした錯覚が生じる理由も説明されている。だがさらに、この点に関しては、「心的アナログン」の存在と反省に関わる問題が伏在すると考えられる<sup>7</sup>。それを明確にするならば、想像作用についてサルトルが行った分析の興味深い点とともに、さらに考察すべき

課題も明らかになるように思われる。

本稿第1節では、「内在性の錯覚」と、それを斥けながらサルトルが説明する「想像作用」の特徴をみていく。第2節では、「心的アナログン」の検討に入る準備として「物的アナログン」についてみておく。第3節では、「心的アナログン」を、「心的想像イマージュ」の契機としての「知 savoir」、「運動 mouvements」、「情感性 affectivité」にそくして検討する。第4節では、心的アナログンの在り方と方法にかかわる問題を「内在性の錯覚」と関連づけて検討する。

## 第1節 「内在性の錯覚」と「想像」の諸特徴

本節では、「アナログン」の考察の前提として「想像の志向的構造」をみておこう。同書の冒頭では次のように述べられている。

本書の目的は、意識の《非現実化》という重要な機能すなわち《想像作用 imagination》と、そのノエマ的相関者 (corrélatif noématique) である想像的なもの (l'imaginaire) を記述することにある (f13/j33)。

ここで、「ノエマ的相関者」と呼ばれているとともに同書の題名でもある「想像的なもの」とは、フッサールの「ノエマ」の概念<sup>8</sup>を参照すれば、「対象やその意味を含む想像作用における現れ」のことを表していると考えられる。そこで、同書の「目的」と「方法」は次のように理解される。たとえば、「想像作用」によってピエールという人物の想像的現れを生み出すとき、私の現在の意識の対象はピエールであるが、こうした「想像作用の本質」を「反省」によって明らかにすることが同書の「目的」であるということである。次に、その「想像作用」のうち、冒頭の分類での「心的想像イマージュ」の諸特徴が述べられていく。本稿の目的である「心的想像イマージュ」の「アナログン」の考察にとって必須で

<sup>6</sup> Morgan (1974), p. 33.

<sup>7</sup> ケーシー (Casey) による「アナログン」の存在という観点からの批判があるが、それは本稿第4節で扱う。

<sup>8</sup> Cf. Husserl (1976), § 99.

あるので、その特徴をみていこう。順番と項目は同書の通りである。

### 1) 想像<sup>イマージュ</sup>は一つの意識である

われわれは、「ピエールという人物を想像する」という意識作用について、ともすると、意識を何か容器のように考えて、ピエールの絵のようなものが「意識の中にある」という考えに陥ることがある。しかも、そうしたことが「想像作用」という事柄の説明になると思い込むことさえありうる。本稿冒頭で言及した「内在性の錯覚 (illusion d'immanence)」とは、このように、或る物の像が意識の中に (dans) あるという思い込みのことである。文字通りにこの思い込みに従うならば、「私がピエールを想像する」と言うときには、それは「ピエールの肖像画を意識の中にもつ」という意味であることになるであろう。そして、このような考えによれば、心の中の像とは、知覚の対象と同じように個体的なものであり、それこそが意識の直接的で無媒介の対象であるということになるであろう。

それに対して、サルトルは、たとえば或る人物を知覚する場合でも想像する場合でも、その個体的で具体的な人物こそ意識の対象<sup>イマージュ</sup>であるとする。そして、次にみられるように、「想像」とは、そうした「意識の対象への関係」、あるいは、「対象が意識に現れる仕方」であるとする。

[...] 一切の曖昧さを避けるためにわれわれはここで、イマージュは関係にほかならないことを思い出そう。私がピエールを想像する意識<sup>イマージュ</sup>はピエールの想像的現れについての意識<sup>イマージュ</sup>ではない。ピエールは直接に到達されるのであり、私の注意は想像的現れ<sup>イマージュ</sup>ではなく対象に向けられるからである (f21-22/j42)。

私がピエールを想像するさい、ピエールは想像的現れ<sup>イマージュ</sup>において現れている<sup>10</sup>のであるが、対象はピエールであって「現れ」ではない。想像的現れ<sup>イマージュ</sup>そのものが対象として意識されているのではない。このように、対象に向かうことが「関係」と言われているのである。そこでサルトルは、「想像」という事柄を表すためには、たとえばピエールについての「心的な想像的現れ<sup>イマージュ</sup>」という言い方よりも、むしろピエールを「想像する意識」と言うほうが適切であるとも述べている。そして、それは「総合」であると言う。本稿第3節でみるように想像作用の場合には「総合」とは、時間意識に従う運動感覚、情感性、知といった契機の「総合」のことであり、その有り様は時間意識にそくして全体的に刻々と変化する。サルトルは、想像作用におけるこの「総合」のなかに画像のような変化しないものが存在することはありえないということを強調している。

このように「イマージュ」はピエールへの「関係」(志向作用としての関係)と解されており、このことこそ、冒頭でみた、「イマージュ」を第一義的に「想像作用」(志向作用)と解するサルトルの考えの論拠だったのである<sup>11</sup>。

### 2) 準-観察の現象

つぎに、サルトルは、「知覚する percevoir」, 「概念的に知らないし考える concevoir ないし penser」, 「想像する imaginer」という基本的な志向作用を比較しながら、「想像する意識」の本質を述べている。

知覚においては、「いかに対象がまるごと知覚されるとしても、対象は私にとって、一挙には一つの面からしか与えられない」、つまり、「対象は側面ないし射映の連続としてしか与えられない」。

<sup>9</sup> 「想像する意識」と訳したのは conscience imageante という語である。imageant(e) は動詞 imager (想像する) の現在分詞であり、この場合、ピエールを想像する意識ということになる。

<sup>10</sup> その想像的な現れ方については次項以下で特徴づけられる。

<sup>11</sup> ドイツ語訳は、image が想像作用を表す場合には Vorstellung (思い浮かべること) と、そうでない場合は Bild (像) と訳している。Cf. Jean-Paul Sartre, *Das Imaginäre* (1994) .

そこで、たとえば正六面体を知覚する場合、われわれは「可能な多くの観点をとって」、「学習する apprendre」(徐々に学ぶ) 必要があるのであり、こうした見ながら知ることは「観察」と呼ばれている。

これに対して、正六面体のことを「概念的に知る」場合には、われわれは「6つの面と8つの稜を同時に考える」。「私は自分の観念の中心におり、それを一挙に完全に捉える」のであり、知覚の場合のように「学習」する必要はない。

次に、想像においては「知は即座である。[...] 像は学習されない。それは学習される対象とまったく同じように組織される。しかし実は、像は現れるや否や、一挙に全体として与えられる」(f25/j47) と言われている。

また、知覚の世界では事物どうしが無数の関係をもつが、想像の場合には事物どうし関係があるとは限らない。そこで、「想像の世界の諸対象はいかなる仕方でも知覚の世界において存在することはできないだろう。それに必要な条件を満たしていないからである」(f26/j48) と言うのである。それは、想像される諸要素は、知覚の場合のように相互に関連しているということがないからである。

以上のように知覚において対象を知るためには対象を経巡り徐々に「学習する」必要があるが、「想像は何一つ教えず、決して新しい印象を与えることもなく、決して対象の一面を露わにすることもない」(f 28/j50)。そこで、想像における知り方は「準-観察 quasi-observation」と呼ばれ、知覚における「観察 observation」と対比されている。

### 3) 想像する意識はその対象物を無として措定する

つぎに、意識が対象を目指す際の「措定(poser)」の仕方(対象を考え、その存在を信じる仕方)について述べられている。

すべての意識はその対象を措定するがその仕方は異なる。たとえば知覚はたいていの場合その対象を存在するものとして措定する。想像作用もな

んらかの措定を含んでいるが、それは4つの形式をとり、4つだけである。その種類を挙げ、( ) 内にコメントを付しておく。

- (i) それは対象を非在 (inexistant) のものと措定する。(架空のものなど)
- (ii) それは対象を不在 (absent) のものと措定する。(いま、ここにはないもの)
- (iii) それは対象をほかの場所に存在するものと措定する。(どこかあるいはいつかは存在するもの)
- (iv) それは対象を「中立化する neutraliser」可能性がある、すなわち、対象を実在として措定しない可能性がある<sup>12</sup>。(存在するかどうか判断不可能な場合など)

こうして、想像されたものの特徴は、「直観に不在のものとして与えられた《不在的直観》」(f 34/j58) なのである。この意味で「想像は或る種の無を内包している」(ibid.) と言っている。

### 4) 自発性

知覚的意識は、与えられた対象を経巡り徐々に学習するという意味で「自らに、受動的に現れる」。これに対して、想像する意識は、想像において対象を産出し維持する「自発性」をもつとされている。

以上の特徴をまとめれば、想像作用は絵のような物を所有することではなく、総合をおこなう「意識」そのものであり、対象に対しては「準-観察」という特徴をもち、対象の措定については無的な特徴をもっている「自発的な作用」である、ということになる。

### 5) アナログン論への前置き

最初に1) でみた想像的現れと対象の関係を確認しておこう。想像的現れは、或る種の無を内包しているとしても対象の「現れ」であり、「現れ」

<sup>12</sup> 「中立化」はフッサールに由来する考えである。フッサールの場合については、小熊 (2013) および小熊 (2018) を参照。

と別に「対象」があるのではないし、「現れ」とは別に、「内在性の錯覚」において想定される絵のようなものがあるのでもない。ただし、目指されているのは「対象」としての富士山であり、「現れ」ではない。また、この場合「対象」としての富士山は、ほかの人にも知覚されたり想像されたりするという意味で実在の対象である。まさしく「想像的現れ」を通して「対象」たる富士山が目指されているのである。なおこの点は、「知覚」の場合も同様であり、通常の意味で実在物としての「対象」は「知覚的現れ」と区別されるが、その「現れ」を通して「対象」が目指されるのである。

つぎに、以上の想像作用の特徴づけを念頭において、「素材」、「アナログン」、「対象の現れ」という表現について、準備的にその大枠を述べておこう。

以上でみてきたのは、本論冒頭の「想像」の分類での「心的想像」であった。これに対して「物的想像」とは、肖像、物まね、素描などなんらかの意味で物的なものを媒介とする想像のことであり、次節でそれらを見る。さて、「物的想像」においても「心的想像」においても、「想像作用」の「素材」、「アナログン」、「対象の現れ」などが考察されることになる。「心的想像」の場合には、肖像や素描のように「物」としても把握されうるようなものを「素材」としていない。だが、「心的想像」もまったく言葉によるだけの「空虚な志向」ではないので、何らかの「素材」が存在するとサルトルは述べている。そして、『想像的なもの』第二部においては、「心的想像」において「素材」として働くのは眼球運動などの運動感覚と情感の二つとされ、その分析が行われることになる。

こうして、「心的想像」においては、素材は志向作用（総合）における「アナログン」（類似物）として働き、そのことによって「対象」は想像的に（無的なものとして）現われるのである。

## 第2節 物的アナログン

### 1) 記号と肖像

「物的アナログン」については、まず、「物的想像」の特質が記号作用と対比して述べられている。記号作用については、記号としての「白い紙片上の黒い線である《事務室》〔という文字〕と、対象である「物的であるばかりか社会的でもある複合的事物としての《事務室》」と (f49/j76) の関係は、「約束」や「習慣」によって成り立つとされている。記号作用にも「素材」はあるが、それは「類似的代理物」ないし「アナログン」として働く素材ではないのである。

では、肖像のような「物的想像」の場合の「素材」、「アナログン」、「対象」はどのようなであろうか。

絵を見るさいに、《それはピエールの肖像だ》あるいは《それはピエールだ》という志向が現れる。そのとき、知覚される物としての絵は「対象」であることをやめて、「素材」が浮かび上がる。先ほどの志向が「想像的現れとなる総合 (synthèse imaginée) の中に入り込み」 (f51/j79)、その「想像的現れとなった総合」が素材として働く。

その「素材」については、線と色の錯雑であるだけでなく、「準-人物（人物のようなもの）」、「準-顔（顔のようなもの）」——知覚の素材と想像の素材が区別出来ないような場合に見られる姿や顔——であると言われている (f49/j77)。

そのさい、「素材」と対象ピエールの間には何らかの類似性があると考えられるが、それはどのようなことであろうか。この疑問に対してサルトルは次のように述べている。「われわれの言う「類似」とは、したがって、ピエールの心的な想像的現れを喚起する傾向がある力ではない。そうではなく、ピエールその人と思わせるような、ピエールの肖像に含まれる傾向のことである」 (f50-51/j78) と。つまり、「肖像を通さずに心的に想像される対象」と「肖像」という二つのもの間に見られる類似性ではなく、端的に肖像がピエールと

して見てとられる傾向のことなのである。

このようにして、素材は「アナログン(類似物)」として働き、ピエールがそこに見てとられる。

なお、絵と物的想像<sup>イマージュ</sup>の対象の関連について次のように言われている。

[...] 反省的意識にとっては、ピエールと絵は二つのもの、二つの区別された対象をなす。しかし [反省的でない] 想像する意識においては、この絵はピエールが私に不在のものとして現れる一つの仕方ではない (f54/j82)。

このように、「反省的意識」は通常、絵とピエールを別のものと捉えるけれども、それらが「不在のものの現れ」となることによってはじめて、肖像画を見るということは成立するのである。このことを忘れてはならないであろう。

以上をまとめれば、「準-人物」ないし「準-顔」が「素材」として与えられ、それが「ピエールをみる」という志向において「アナログン」として働き、ピエールは「不在のものとして現れる」のであり、それが対象だということになる。

## 2) 物まねの意識

サルトルは、物まねの現象を分析するために、女性の物まね芸人フランコネが男優モーリス・シュヴァリエの物まねをするという場面を設定している。

サルトルによれば、この場合、最初の「素材」はフランコネの「小柄で、小太りで、黒髪をしている」身体であるが、その身体の「麦わら帽」や「下唇を突き出し、頭を前に出す」姿勢が「記号」(f59/j89)として「知」によって理解され、そこから観客は「シュヴァリエをまねているのだ」という「意味」を読み取る。

そして、そこに、情感性<sup>13</sup>が関わってくる。サ

ルトルはまず、第一に「あらゆる知覚には情感的反応 (réaction affective) が伴う」、第二に「あらゆる感情 (sentiment) は何ものかについての感情である」(f62/j92) という原則を立てる。そして彼は、それらをシュヴァリエについての知覚に適用する。そこでサルトルは、「私がモーリス・シュヴァリエを見るとき、その知覚はこの反応は、シュヴァリエの容貌に、われわれがシュヴァリエの《意味》と呼ぶことができるかもしれない、いわく言い難い或る種の性質を投影している」と述べている。

次に、最初の「シュヴァリエをまねているのだ」という「意味」に、シュヴァリエの知覚からの反応としての「情感的意味」(シュヴァリエの《意味》)が合体することになり、この「情感的意味」が「真の直観的素材」をなすと言われている。

こうして、「情感的意味の結びついた諸記号」、つまり、フランコネの姿や仕草を通してみられる「《シュヴァリエ》という表現的本性 (nature expressive)」(f63/j93)こそ、「想像における対象<sup>イマージュ</sup>」であるということになる。

以上のように「物まねの意識」においては、「シュヴァリエの表現的本性」が対象として現れるにあたって、情感的契機が重要な媒介的働きをしているのであり、このことは、「心的想像<sup>イマージュ</sup>」における「情感的契機」の扱いの伏線ともいえる事柄である。

## 3) 図式的素描

人の姿勢を表すピクトグラムのような、あるいは、断片的な線のような図式的素描における「素材」は、図を構成する黒い線や断片的な線といったものになるだろう。だが、これらの黒い線をとおしてわれわれは単に一つの影を見るだけではない。われわれは完全な人を見るのであり、そこにわれわれは、未分化ではあるが、色、顔の輪郭、表情を含むさまざまな身体的特徴を読み込むのである (f66/j97)。

この場合に眼球運動が大きな役割を果たしていることが述べられている (f66/j97-8)。眼球運動

<sup>13</sup> 次に述べられる「感情」との区別を示すため、講談社学術文庫版(95頁の訳注34参照)にならって、affectation, affectivitéは「情感」,「情感性」と訳す。

が知覚を組織化し、取り巻く空間を切り直し、力の領野を規定し、線をベクトルに転換する。自分の眼球運動にしたがって、そこに顔の輪郭の一部を思い描くことができるが、その図式が違った風に読まれる場合には、それに対応する眼球の運動も異なってくる。

こうして、「図式的素描」において、「黒い断片的な線」という素材のほかに、仮説的に形を考える「知」とそれに従う「眼球の運動」が必要となり、それらによって、「走っている一人の男」また「顔の輪郭線」といった形が対象として想像的に現れるのである。

またこの箇所では、前提として、物の形や動きを知覚的に捉えるためには、それぞれ別の仕方ではあるが、眼球を動かすことが必要であると述べられている。たとえば、ミュラー＝リヤーの錯視図（両端に閉じられた飾りがつけられた線と開かれた飾りがつけられた二本の線）の見方が眼の運動と関連しているものとして解釈されている (f 69/j102)。

これに関連して、「図式的素描の意識における代理的要素は、本来そう言われる線ではなくて、線の上に投影される運動なのである」とも言われている (f74/j104)。これは、「心的想像」の契機としての「運動」を先取りするものと言えよう。

#### 4) 壁の上の染み、タペストリーの模様など

レオナルド・ダ・ヴィンチも言及していたこのような興味深い現象について、サルトルは次のように述べている。

自由に継起したものにせよ〔模様のような〕或る構造によって促されたものにせよ、いざれにしても、それらの〔眼球〕運動は、最初は意味を欠いていても、ある知を自らに同化することによって、突如として象徴的なものとなる。〔眼球〕運動を仲介して、その知は、染みの上に具体化されることによって、<sup>イマージュ</sup>想像的現れを生み出す。とはいえ、それらの運動

は自由な戯れとして、知は根拠のない仮説として与えられている (f78-79/j110-11)。

こうして例えば、模様の中から花束や顔の上部が想像的に現れたりする。けれども、その染みは、デッサンの場合のように何かを代理するものとして措定されているのではなかった。この場合の<sup>イマージュ</sup>想像の対象も存在するものとして措定されていない。「想像的現れはしたがって純然たる幻影として、すなわち仮象によって具現化される戯れとして」(f79/j111) 与えられるのである。

ここでも眼球の動きが重要な役割を果たし、それによって想像的現れが生じると言われているとともに、<sup>イマージュ</sup>心的想像との親近性が示唆されている。

#### 5) 入眠時の想像的現れ

一般に、入眠時に幾何学模様や人物、風景が見えたり、音や声が聞こえたりする現象が「入眠時心像」あるいは「入眠時幻覚」と言われる。その際、「素材」となる現れとしての模様や風景はさまざまであり、可塑的で可変的である (f101/j132) が、眼球が自由に動かさないために、それらに対して、位置をとってそれらを局在化したり、形状の輪郭を追ったりするといった注意や観察ができず (f 95/j126-7)、「準-観察」(f81/j113) にとどまり、同じ理由から「自発性がない」。

版画を見るような場合には知覚される「素材」に意識からの独立性がみられるが、こうした入眠時の<sup>イマージュ</sup>想像的現れの場合にはそうではない。素材は意識から独立しておらず、意識と不可分であり、入眠時の意識がなくなれば一緒に消え去る。また、「対象」は実在のものとして措定されず、たとえば「実在しない猫を見る」(f102/j133)。この場合は、素材としての現れはあるが、「心的想像」<sup>イマージュ</sup>の場合のように自発的な意識ではない。

#### 6) 物的想像のまとめ

「物的想像」についてのサルトルの見解を見てきたが、「われわれが想像する意識の系列のレベ

ルを高く昇れば昇るほど、素材は次第に貧しくなる」(f106/j140)と述べられているように、肖像の場合を最高として、「素材」は多くの場合乏しいものである。そのさい、「想像における対象およびその現れ方」も「対象の措定のされ方」も様々である。さらに、注目すべきことは、「素材」のほかに、「知」、「記号」、「情感性」、「眼球の運動」(有無をふくめて)などがみられたということである。こうした契機が対象の志向において「総合」として働くことによって「対象の想像的現れ」が形成されるのであった。

次にみる「心的想像」<sup>イマージュ</sup>においては、「物的素材」は存在しないものの、今度は「運動」と「情感性」が「素材」ないし「アナログン」として働くことされるのである。逆に言えばこれらの働きはすでに「物的想像」<sup>イマージュ</sup>においても見られたのである。

さて、サルトルは、第一部の最終節において、第二部への準備として、「心的アナログン」の存在とそれを扱う方法について述べている。

「物的想像」<sup>イマージュ</sup>においては何らかの物的アナログン(類似物)が想像的に対象を出現させるのであったが、これに対して、「心的想像」<sup>イマージュ</sup>において代理となる素材」すなわち「心的アナログン」について、「反省的な記述」は「直接教えてはくれないということを認める必要がある」(f111/j145)。そのゆえに、方法としては、確実な事象による「現象学」を離れ、仮説と実証の方法によって蓋然的事象を扱う「実験心理学」に依存せざるをえないというのである。

しかし、第二部の内容をみてみると、実験心理学の成果を援用してはいるものの、現象学的反省による部分も多いと思われる。こうした曖昧さが、「心的アナログン」の存在と反省の方法論についてのサルトルの扱いには残存しているとおもわれる。だが、この問題は、「心的アナログン」の有り様をみたのちに、第4節で検討したい。

### 第3節 心的アナログン

『想像的なもの』<sup>イマジネール</sup>第2部では、その副題にあるように「心的想像におけるアナログンの本性」が問われている。そして「心的想像」<sup>イマージュ</sup>は「知 savoir」と「運動 movements」と「情感性 affectivité」の三つの契機からなるとされており、それらのうちの「運動」と「情感性」が「アナログン」として扱われている。三つの契機をみていこう。

#### 1) 知

サルトルは最初に、「何ものかへの、あるいは、何ものかについての意識である」という意識の特質である「志向性」<sup>イマージュ</sup>にそくして、心的想像における「知」の契機を次のように説明している。

一言でいうと《純粹志向》とは形容矛盾である。志向とはつねに何ものかへの志向だからである。だが、想像においては、志向はピエールを不確定のまま目指すわけではない。それはピエールを、金髪で、背が高く、上向き鼻だったり驚鼻だったりするピエールを目指すのである (f115/j149)。

サルトルは、このように、志向の対象となる何ものかを規定的に目指すということが「知」の契機であると考えているが、想像において働く知的要素を、純粹な知と区別して「想像的知」と呼んでいる<sup>14</sup>。この「想像的知」は、あるものを思い浮かべるといふ十全な「心的想像」ではないが、「読者が読書に十分心を奪われている時」にみられるように、自らを超越し、外部のものとして関係を措定しようとする意識である (f132/j166)。

つぎに、同書の叙述の順序とは異なるが、運動的アナログンについてみてみよう。

<sup>14</sup> またこれは、「純粹な知」と比べると想像の要素が入り込んでいるという意味で「降格した知」とも呼ばれている。

## 2) 運動的アナログン

サルトルは、「多くの著述家たちが想像的現れと運動の間にある密接な関係を強調している」ところから、「運動すなわち運動感覚が想像的現れの構成に本質的な役割を演じるのではないかどうか」を探究しているが、彼は、「どのようにして運動が想像的現れを喚起するのか」という形ではなく、次のような形で問題を立てる。これは、のちにみる「志向」の重視につながるものである。

いかにして運動感覚は、視覚的知覚がもたらした対象を目指す想像する意識にとって素材の役割を果たしうるのか (f147-8/j187)。

### 知覚による運動の軌跡の形成

この疑問に答える準備としてサルトルはまず、指を動かしながら、知覚しつつ軌跡を形成する場合を記述している。

私は眼を開き、右手の人差し指を見つめる。人差し指は宙に幾つかの曲線や幾何学的な図形を描いている。私はこれらの曲線を、ある程度、指の先に見ている。実のところそれはまず、網膜の印象がうっすらと残っていることが原因となっており、人差し指はすでにないの、一種の航跡がその場所にまだ残っているのである (f148-9/j188)。

こうして軌跡が残ると言われているが、次に彼は、それが連続的に形成されていくことを、フッサールの把持 (rétention)、予持 (protention) という概念を使って説明している。「把持」とは「運動における消失したばかりの位相に向かう空虚な志向」である。言い換えれば、それは「現在の視覚的感覚を中心とする知であり、その今を、一定の質をもつあとにも在るものとして、つまり、ほかの感覚ではなくまさしく消滅したばかりの感覚にのみ続くあとのものとして出現させるものであ

る」。他方、予持は、「予期であり、その予期は〔現在のと〕同じ感覚を、また前もって在るとしても与えるのである」(f149/j189)。

このことによって、線は連続的に形成されるとともに、軌跡として残るのであるが、つぎに、サルトルは「正確さを期して」、こうしたことが起こるのは、意識が「何ものかの意識」という志向性をもつからだということに注意している。「把持と予持が実際に目指すのはそれらの印象によって構成された対象、つまり、私の人差し指の描く軌跡」(f150/j189-90)であるゆえに、線は連続的に軌跡として形成されるのである。その志向がなければ、先の事例は、軌跡ではない単なる指の動きの知覚そのものでもありうるのである。

### 想像による図形の形成

次にサルトルは、想像しながら軌跡を作る場合を以下のように記述する。

ドゥヴェルスオーヴェルは、被験者たちは眼を閉じて二本の同じ長さの線を引くとき、彼らが二本の線の両端の視覚的表象を頼りにして線を引くことを明らかにした。したがって、最もよくみられるのは、把持と予持とが、もし私が視覚器官によって知覚したとすれば両志向がもつはずであったような様相のもとに、運動の消え去った位相を保持し、あるいは、未来の位相を予見することである。〔…〕ここでは、把持全体が同時に運動的なものの視覚的なものへの転換となっている〔…〕(f153/j192-3)。

この過程において把持は運動感覚を視覚的印象に転換し、通常眼球の運動である筋肉運動は、視覚的印象として期待され受け取られる。この結果、運動印象が「過去に滑ることになるときそれは視覚的印象の形をとることになる」(f154/j194)。眼球の運動が継続すると以上のものであり、それが終結するときには、それが経た道程は保持され、

この把持によって対象の視覚的形の大部分が思い描かれる。また、運動の将来の方向に向かう「視覚的」予持が、視覚的想像構成において、重要な役割を果たす。こうして、これらの作用を媒介として、運動は視覚的形態に類似的なものに転換されると言われている。

以上のように働く「把持・今・予持」をこの場合の「時間的形式」と呼ぶことができるであろう。だが、筋肉運動と想像的印象とが対応し、前者が後者に「転換される」というのであるが、その「転換」は、結局のところ、どのようにして起こるのであるのか。

### 志向性の契機

この点でわれわれは、知覚しながら指の動きを追う場合と同様に、サルトルの一連の説明の最終部にみられる「志向性」の契機に注目しなければならない。この契機を重視してサルトルは次のように考えている。まず、「具体的な印象は、その本質からして運動的である。したがって、視覚的なものとしては与えられえないであろう」。ところが、視覚的ものを想像する場合、両者の関係は次のようになる。「一方では、具体的印象は志向された形態の唯一の具体的要素であり、この志向された形態に現前性の性質を付与し、それが目指すべき《何ものか》を供給する。だが他方では、具体的印象はさまざまな視覚的印象を目指す諸志向から、その意味と効力と価値を引き出している」。つまり、運動的印象は形態への志向を充実し、逆に、その志向は運動的印象に意味を与えることになる。こうして、「この視覚的意味を具えた運動的印象は視覚的形態のアナログンとして機能することになるだろう」(f154/j193)。

つまり、点が刻々と動くのを想像するために「時間的形式」は必要であるが、それを含めて運動的印象を想像上の軌跡に「転換」するのを可能にしているのは、図形を想像しようとする「志向」なのである。このことは、先にみた「知覚」の場合

を参照すれば明らかであると思われる<sup>15</sup>。

結局、運動感覚が視覚的想像の場合の類似的代理物(アナログン)として働きうるのは「志向性」と「時間的形式」によると考えることができるであろう。

### 運動的アナログンの役割のまとめ

以上で、運動的アナログンの説明の主要部分を見たが、その説明の最終部で、サルトルはアナログンの役割を四点にまとめている。まず、これまでわれわれがみてきた説明はつぎの二点で表されている。

- (1) 一連の運動的(ないし触覚的)印象の継起は一連の視覚的印象の継起のためのアナログンとして機能しうる(f159/j198)。
- (2) (運動的系列として与えられた)一つの運動は、運動体が描く、あるいは描くとみなされる軌跡のアナログンとして機能しうる。つまり、一つの運動的連続は、視覚的形態の類似的代理物として機能しうるということである(*ibid.*)。

以上は、眼を閉じて人差し指を動かしながらそれに対応する視覚的印象の継起を想像する場合とその軌跡を想像する場合に対応するであろう。次に、これまで説明されなかった二つの点に加わる。

- (3) 運動のきわめて小さな位相(たとえば、ごくわずかな筋肉の収縮)だけで、運動全体を代理するのに十分である。
- (4) 収縮する筋肉は、想像的現れとして志向された運動が現実<sup>イマージュ</sup>に起こる際に働く筋肉とは限らない(*ibid.*)。

<sup>15</sup> スミスは、指を動かしながら想像のうえで図形を描く際のサルトルの説明を解説しているが、この「志向性」の契機を明示していない。Cf. Smith (1977)。

(3) は、サルトルの例を使えば8の字のような形の図形を想像しようとする場合、眼球運動による投影はそのほんの一部分だけで十分だといったことである。(4) は、たとえば、視覚的図形を想像するための運動は眼球運動でも指の動きでもよいといったことであろう。

最後に、以上を前提として、想像された視覚的形態は、より複雑な図形や、「私の拳<sup>こぶし</sup>、インク瓶、アルファベット文字」さらに「動くブランコ」などのような「より広い意味をもつ」対象でもありうる<sup>16</sup> (f159-161/j198-200)。

### 本項のまとめ

サルトルは以上により、身体の運動に伴い、時間的形式にそくして刻々と変遷する運動感覚を「心的アナログン」の一種として説明した。このアナログンを介して、空間的形態が想像的に現れるが、それは、「内在性の錯覚」において意識の中にあると想定される絵のようなものではない。この限りで、彼は「内在性の錯覚」に陥っているわけではないと言えよう。

ところで、「運動」をアナログンとして認めることは、二つの重要なことを含意すると思われる。その一つは、知覚の場合と同様に、運動ないし運動感覚という身体的な事柄を想像の要因として認めているということである。もう一つは、このことによって想像と知覚の関係を考え直す必要が生じるかもしれないということである。たとえば、第1節2) でみたように、知覚がいわば対象を経巡る「観察」であると言えるのに対して、想像は「準-観察」という特徴づけがなされた。そしてその場合には、「想像的現れ<sup>イマージュ</sup>」は「現れるや否や、一挙に全体として与えられる」と言われていた。だが、上で見たように、想像する際に「時間的形式」が働くというのであれば、その場合わずかで

あっても「対象を経巡る」ことが必要であるという可能性は考えられる。これに対しては、上の(3)を参照して、想像の場合には、対象を運動によって全面的にたどる必要はなく、ほんの少しでよいのだと反論されるかもしれない。たしかにその通りなのだが、この可能性を考えるにあたっては、知覚と想像の差異及び関連の検討が別途必要になってくる。

ここで要点のみをまとめておくとすれば、心的アナログンとして「運動」を認めることは、「想像」に身体的な事柄を導入するとともに、それにまつわる知覚との関連性の問題も生じる可能性があるということの意味するであろう。

### 3) 情感的アナログン

#### 志向性としての情感

サルトルは、想像の情感的契機について述べるにあたって、心的諸状態の連想的結びつきによって情感が成り立つといった連合主義的な考えを否定する。そのうえで、歓喜、苦悩、憂愁などの「諸感情はそれぞれが特有の志向性を持っており、それらの感情は、自己を超越する——ほかのいろいろな仕方のうちの——ひとつの仕方を表す。憎悪とは誰かについての憎悪であり、愛は誰かについての愛であるといったように」(f137/j175) と述べている。このようにサルトルは感情を志向的なものと捉えている。

サルトルは対象に付与される情感的性質について、それらが「対象の特質ではなく、また実のところ、《性質》という用語自体が不適切なのだ」と述べている。「諸性質は、対象の意味なのであり、対象の情感的な構造なのだという方がよいだろう」(f138/j176-77)。それ〔情感〕は、たとえば、「〔或る人物の手の〕繊細さや白さ、〔身振りの〕活発さが、私の意識に現れる或る仕方なのである」(f138/j177)。だが、「それは知的認識ではない。繊細な手を愛することは、いわば、この手を繊細なものとして愛する或る種の仕方」なのである。そして「愛はその対象に、この繊細さやこの白さの

<sup>16</sup> この箇所では、「今や、われわれに関心のある問題に取り組むことができる」(f159/j198) というように、「運動的アナログン」による説明の目標は、単純な図形などの想像ではなく、通常の「対象」の想像だったのであり、それがここで達成されると言われている。

情感的意味とでも呼べるかもしれない或る種の調子 (tonalité) を投影する」(f139/j177) ののである。サルトルによれば、このような知覚に対して「表象的なものは或る種の優位を維持する。生き生きとして、白く、繊細な手が、まず一つの純粹に表象的な複合体として現れ、続いてその手は、情感的意識を規定し、この意識が、真新しい意味を与えにやってくる」(f139/j178) のだと考えられている。

以下では、知覚ではなく情感的契機を含む想像のケースについて、研究者たちのさまざまな解釈を検討しながら、多様な検討の可能性をみておこう。

### 想像における情感的契機

サルトルは知的契機 (表象) が欠けていると仮定した場合でも、「その意識とは、繊細で、優美で、純粹な何ものかへの意識であり、それは、繊細さと純粹さの、厳密に個別的な色合いを伴っている」(f140/j179) と考えている。これはまた、「無差別でどんな記述にも応じない一つの塊のような意識」とも言われている。

だが、このような場合に「表象」や「意味」が欠けているかどうかは議論の余地がある。上で述べられた「一つの塊のような意識」である情感的意識も、スミス<sup>17</sup>の指摘するように、何らかの規定を具えていると考えるべきかもしれない。スミスは情感のみがアナログンとして働く場合について、何らかの対象的规定という知的契機が必要ではないかという疑義を呈している。しかも、このことは、本節1) でみた、想像作用は何らかの規定された対象を目指すというサルトル自身の考えを思い起こせば、もっともな異論と考えられる。

### 情感と運動的契機

さらにスミスは、心的アナログンの働きにおいて、情感と身体運動の契機を独立させずに身体運

動の契機に一本化ないし統合しようとしている<sup>18</sup>。だが、『想像的なもの』第四部の次の文にみられるように、サルトル自身もこの点に賛同する可能性はあるように思われる。

われわれには、嘔吐、吐き気、眼孔の拡大、両眼の輻輳反射、勃起は、それらに伴う感情とともに、厳密に構成する層に属するように思われる。想像とはさまざまな意識内容のうちの一つではなく、むしろ一つの心理的形態であることをわれわれとともに認めるならば、これほどたやすく理解できることはない (f 263-64/j312-13)。

この点は「情感」と「運動」の契機の関連の問題としてさらに検討する余地があるだろう。

### 世界との習慣的繋がりと情感的契機

本稿第1節2) でみたように、サルトルの考えでは、知覚においては対象や世界について「観察」によって何かを「学習する」ことはあるが、想像作用においては「対象や世界について新たに学習すること」はないということであった。だが、ホブキンスは、情感に関連して、知覚に伴う情感だけでなく、想像に伴う情感の場合にも「何かを学習すること」がありうるのではないかという問題を提出している。

つまりこういうことである。たとえば、私が、知っている人物の姿や立居振る舞いを想像し、そのことによって、その人物の姿などに当初気づかなかった魅力を発見するとする。そうすると、その想像によって、私はその人から魅力を受け取るということをして「学習した」ことになる。また、私が或る生物を想像し、その姿に不快感をおぼえるならば、そのことにより、私は、そうした自分の反応を「学習した」のである。このように、想像をもとにした「学習」がありうる、というのがホ

<sup>17</sup> Cf. Smith (1977), pp. 74-75.

<sup>18</sup> Cf. *ibid.*, p. 76.

ブキンスの意見である<sup>19</sup>。

だが、ホブキンス自身も認めているように、この批判によってすぐさま、サルトルの立場が崩れるわけではない。たとえば、或る人物の想像から情動的反応を学習するとすれば、それは私の身体や性格や習慣による反応であると言えるかもしれないが、「想像された対象や風景への情動的反応」の全体をさらにあらたに想像することは、それはもはや身体や性格や習慣によるものではない。そうだとすれば、その想像は私に、世界について何事かを教えるということはないかもしれない。さらには、「情動的反応を含む私が想像した状況」に対して、私は、何であれ私の好きなことを想像できるかもしれない。結局のところ、想像は一般に私の望む場所や状況を新たに見直す際に自由なのである。言い換えれば、想像には、状況から抜け出し、それを対象化する自由があるということになる——サルトルの立場からこのような反論も可能であるとホブキンスは考える<sup>20</sup>。そうだとすれば、当初の、想像において学習はなされないという考えは維持できるわけである。

こうして、想像的情感について二つの見方が成り立つのであるが、サルトル自身想像全体の中に、第一の「構成的な層」と第二の「一般に像への反応と呼ばれる層」という二つを区別している（f262/j311）。第一の層とは、「像を形成するために構成作用となる志向、運動、知、情感」であり、第二の層は「非現実的なものに対して、程度の差はあるとしても自発的な反応を表す志向、運動、情感、知」のことである（f263/j312）。

第一の層においては、「たとえば、何気ない物思いによってアニーに対する私の愛やピエールに対する憤りが湧き起こる」（f271/j320）。これは、いわば、世界や対象から身体、性格、習慣などにより束縛され、自動的に起こる情感の層である。これに対して、第二の層においては、「ひとたび像が構成されると、私は新たな情感、新たな判断

によってそれに対して意図的に反応できるようになる」のである。つまり、前の層全体に対してあらたに、そして自由に反応が新しい総合的意識として形成されるのである。（f272/j321）。たとえば、想像への反応としての自分の当初の情感を新たに想像することによって、アニーやピエールに対する情感は変化するかもしれない。別な例を出せば、ゴキブリや蛇の想像に嫌悪感や恐怖を抱く人も、一段高い立場からそうした反応を想像し、新たな観点や態度に立って、それらの美点を見つけて好ましいと思うかもしれない。

このようにサルトルは、想像の二つの層を区分し、それぞれが情感も含むとした。だがこの区分は、前者は身体や習慣に依存し、後者はそうではない精神的な態度であるといった単純な二分法による見方とも思われる。このような区分や関連が可能なのかどうか、また、情感の位置づけがどうなのかについては、あらたに検討し直されなければならないと思われる。

#### まとめ

こうして、情感のアナログンについては、対象の規定を含む知的契機なしの情感のアナログンは考えられるかどうか、情感と身体的運動の関連、身体的、性格的、習慣的な想像的情感はありうるかどうか、またそうした情感と別に自由な想像と情感があるかどうかといった問題が課題として残されていると言えよう。

#### 第4節 心的アナログンの存在論的・方法論的問題について

前節で「心的アナログン」の内実をみてきた。それは、時間的形式にそくして刻々と全体的に変化する「運動感覚」と対象についての「情感性」からなるのであった。「内在性の錯覚」との関連であらかじめ確認しておけば、形態や色彩という要素は、「想像された事物の現れ」の要素とみなされうるとしても、心的想像における「心的アナ

<sup>19</sup> Cf. Hopkins (2011), pp. 101-103.

<sup>20</sup> Cf. *ibid.* p. 111.

ログン」には属していない。序論および第1節1)でみたように、われわれは、「イマージュ」を「想像作用」、あるいはそうでなければ、対象を含む「想像における現れ」のことと解したが、「内在性の錯覚」とは、「想像における現れ」を「心的アナログン」とみなす錯覚だということになるであろう。

このことに留意すれば、サルトル自身が「内在性の錯覚」に陥っていると批判は当たらないことになるが、ケーシー<sup>21</sup>は、サルトルはそれでも一種の「内在性の錯覚」に陥っていると批判しており、また、サルトル自身の「心的アナログン」の在り方や反省のされかたの説明にも問題があると思われるので、そうした点を検討しよう。

「心的アナログン」の存在やそれを知るための方法の問題については、同書第一部末尾と第二部末尾で扱われていて、両者は同趣旨であるが、後者では、すでになされた「心的アナログン」の説明をもとにして、「内在性の錯覚」の起源が説明されている。

### 1) 「内在性の錯覚」の起源

第1節でみたように、眼前にないものを想像するということは、不在ないし非在の対象が現れるということである。そしてこのことは、存在するものが知覚的に現れる(現前する)ということと比べると、不可解なことも思われる。サルトルの例を使えば、眼前にないパンテオンを想像したという場合、「不在のパンテオンの現前に立ちあっていたというのは矛盾であるという印象」が生じる。そこで、「パンテオンに酷似した対象が現前していたのであり、その対象こそ想像的現れであった、と言う方がよいのではないか」

(f173/j214) という考えが生じる。この考えに従えば、「不在のものは不在のままであり、現前しているものはまったく現前の性格を保持することになる」(f173/j215)。

こうした考えが「内在性の錯覚」の動機となる。

そして、「想像が呈示する物のさまざまな性質をアナログンに移すことにより、人々は、想像する意識のためにミニチュアのパンテオンを構成し、反省的意識は想像する意識をこのミニチュアについての意識として与えるのである。この構成の結果が次の蜃気楼である。つまり、意識の対象は現実的ではあるが外部にはない感覺的性質の複合であると思込んでしまうのである」(f173/j215)。こうして、意識に内在する「感覺的性質の複合」を「アナログン」とみなす考えが生まれるのである。

以上は、「内在性の錯覚」の起源についてのサルトルの説明であり、さきにも確認したように、サルトル自身がこの錯覚に陥っているわけではない。そして、ケーシーもこの点は認める。

### 2) ケーシーの批判

だが、ケーシーは、「サルトルが心的アナログンに、想像的経験における超越的身分を認めるときに、サルトルはより巧妙な仕方その錯覚に屈服しているのではないか」(p. 148) という疑念を提出している。ケーシーがこのように言うのは、サルトルの「心的アナログン」の存在についての次のような言明が背景にあるからである。

心的想像の素材が対象としてすでに構成されていなければならないという必要性。これをわれわれは代理物の超越(transcendence)と名づけよう。だが超越は外在性(exteriorité)を意味するのではない。外的なのは代理された物であって、その心的《アナログン》ではない(f110/j145)。

このように、「心的アナログン」は、外在的でないとはいえ、「超越」と呼ばれる「対象」なのである。「超越的对象」とされている心的アナログンについてケーシーはサルトルの言葉を使いながら、つぎのように述べている。

パラドクスは、心的アナログンが内在的で超

<sup>21</sup> Casey (1980). 以下、ケーシーへの参照、引用は同論文の頁数によって行う。

越的であるということ——心に内在的であるが、心の特殊な作用に対しては超越的であること——である。〔…〕あたかもこのパラドクスを強化するかのように、サルトルは、心的想像におけるアナログンは、それが直接に意識に与えられることによって、「心的に与えられている」と述べている。〔…〕アナログンはその存在において純粹に機能的であるわけではない。それはそれ自身の権利において存在する対象である（p. 149）。

このように、ケーシーは、超越的对象が存在し、それが代理物として機能するという意味でサルトルは「内在性の錯覚」に陥っているとして批判するのである。たしかに、サルトルは絵のようなものあるいは「感覺的性質の複合」が意識に内在するという形での「内在性の錯覚」に陥ってはいないが、心的アナログンを「超越的な対象」と認める限りでは、ケーシーのより包括的な意味での「内在性の錯覚」に陥っているとも考えることもできる。

だが、ここで問題なのは、サルトルが、心的アナログンは「対象」として与えられると言っているということである。実際に、心的アナログンは「対象」として与えられるのであろうか。この点について、サルトルはどのように考えているのであろうか。

### 3) 心的アナログンの反省について

この点について検討するために、われわれは「対象」としてそれが把握されるかもしれない「反省」についてのサルトルの考えをみてみよう。本稿第2節6)で言及したように、サルトルは『想像的イマージュのネール』第一部の末尾で次のように述べていた。

反省的な記述は、われわれに心的想像<sup>イマージュ</sup>において代理となる素材については、直接教えてはくれないということを認める必要がある。というのも、想像する意識が消滅したとき、その超越的内容も想像する意識といっしょに消

滅してしまったからである。記述可能な残滓は存続しておらず、われわれが向かい合っているのは、当初の意識とは共通点のない、別の或る総合的な意識である。したがってわれわれは、内観によってこの内容を捉えることを期待することはできない（f111/j145-6）。

サルトルは、想像的意識において心的アナログンはその機能をはたすことによって「消滅」し、それゆえ、「記述可能な残滓は存続しない」と考えている。だが、われわれが前項でみたところでは「心的アナログン」は超越的对象として存在すると言われていたのに対し、上の引用文では、それは反省には与えられないという矛盾するような見解になっている。

それが反省には与えられないという認識を踏まえて、同書第二部は、心理学的実験の結果に依拠する「心的アナログン」の考察に移ったのである。それにもかかわらず、第二部には、心理学的実験の成果だけでなく、現象学的反省による事柄も多く見られる。実際、われわれが「心的アナログン」についてのサルトルの記述に納得しうるとすれば、単に心理学的実験結果によるというだけでなく、ある図形を想像的に思い描くときに眼球の運動や指の運動の感覚に気づくことや、ある人や物を想像するときに何らかの感情的なものを感じ、それに気づくことがありうるからであろう。だとすれば、こうした「気づくこと」は無ではないし、だからといって、何か確固とした「対象」というわけでもないということになるのではないか。

サルトルが「心的アナログン」の名のもとに指し示しているものは、「対象」と比べれば曖昧な仕方ではあるが、「気づかれている」といった与えられ方をしているものことではなかろうか。それは、サルトルがのちに言うところの「前反省的」、「非措定的」<sup>22</sup>に与えられると捉えるのが相

<sup>22</sup> Jean-Paul Sartre, *L'Être et le Néant*, p. 19. 邦訳『存在と無』（第一分冊）28頁。「対象についてのあらゆる措定的意識は、同時に、それ自身についての非措定的意識である」。

応しいように思われる。

#### 4) 反省的でない与えられ方

この点で思い浮かぶのは、ケーシーが少なくとも先の論文では踏み込まなかった「心的アナログン」の実質である。第3節でみてきたように、形態や運動の面での「心的想像<sup>イマージュ</sup>」は「現在・把持・予持」という「時間的形式」を具えた「運動感覚」とともに成立するのであった。『想像的なもの』の出版(1940年)当時、サルトルにその全貌は知られていなかったとしても、この「時間的形式」は、フッサールが「内的時間意識の総合」として記述していた事柄である。フッサールによれば、「時間的形式」にそくした内的時間意識の総合のなかで一定の感覚的性質などが構成されるが、その過程自体は、ある程度気づかれてはいても、「反省による対象」ではないのである。サルトルは、「心的アナログン」は無ではないために、それは事物とは違うけれども「超越的对象」であると表現し、他方で、それは消え去って「残滓は存続しない」と矛盾するような叙述をしていた。だがわれわれは、サルトルが「心的アナログン」と呼んだことについて、フッサールが記述した「時間意識の総合」といった前反省的で非措定的な在り方を考えることができるのではなかろうか。フッサールの記述をみてみよう。

ちょうど今長く鋭い音が聞こえたとする。その音は一本の伸びた線のようなものである。私がどの瞬間で停止しても、〔それまでの音が把持されて〕そのつどそこからその線は伸びてゆく<sup>23</sup>。

この事例に関して、四つの「知覚されている」<sup>24</sup> 事柄についてフッサールは説明している。そのうちここで関連する部分のみをみておく。

(3) 音の今の知覚と、それと同時にそれと結合した、たった今音が存したことへの注意。

(4) 今における時間意識の知覚。私は、鋭い音である一つの音が今現出していることに注意し、またしかじかの仕方で過去へ伸びていく鋭い音が今現出していることに注意する〔…〕<sup>25</sup>。

このように、フッサールは今の音とそれについての時間意識の知覚があると言っている。そして、(4)については、さらに、「もちろん、私はその時間意識を有してはいるが、しかしその意識自身が再び対象 (Objekt) となっているわけではない」<sup>26</sup> と言われている。このことは、音の意識に伴う時間意識はその場で反省の対象になっているわけではないが、「気づかれて」いるということを示しているであろう。

そのような気づき方を認め、サルトルの「心的アナログン」が反省において「対象として与えられる」という理解を斥け、その点を訂正するならば、サルトルの「想像」についての記述には有益な点が多いと考えられる。トンプソンはサルトルの想像についての現象学的記述は、そのような「前反省的、非措定的」与えられ方によるものだとしながら、その経験の在り方を「私は、私の経験によって呈示される志向的对象と性質に気づいているだけでなく、むしろ経験の進行的活動に気づいているのである」と整理している。

このように理解すれば、「それが私に想像されたものとして現れる限りにおいて、ロンドンに居るピエールは私には不在のものとして現れる」<sup>27</sup> といった、本稿第1節の3) でみた、想像作用の記述も的確なものと考えられる。

「類似的代理者」ないし「アナログン」(類似物) と呼ぶべきであるかどうかは別にして、サルトル

<sup>23</sup> Husserl (1966), Beilage VI, S. 112.

<sup>24</sup> ここで「知覚」という語は「把持」なども含む広い意味で使われている。

<sup>25</sup> Husserl (1966), Beilage VI, S. 113.

<sup>26</sup> *Ibid.*

<sup>27</sup> Thompson (2007), p. 285.

がその名の下に考察した事柄は、「反省の対象」ではなく、フッサールの「内的時間意識」という仕方で「前反省的・非措定的」に気づかれる事柄であろう。そのことを銘記するならば、「心的アナログン」として記述された事柄には、さらなる探究の必要があるとしても、多くの認しうる点が存するものと思われる。

## 結論

これまでの考察をまとめておこう。

- 1) 「内在性の錯覚」へのサルトルの批判は認しうるが、「心的アナログン」が何らかの「対象」として存在することは認しえず、代わりに、「非措定的、前反省的意識」を重視しなければならないということである。こうして「心的アナログン」についての反省論的難点を取り除いて考えてみれば、サルトルの想像の分析には以下のような今後の探究につながる方向性が描かれているように思われる。
- 2) 想像の運動性および身体性の方向性。すなわち、想像と身体感覚の関連はさらに追求すべきであろう。なお、知覚にも眼球運動が伴うという示唆を考慮すれば、これは想像と知覚の関連の問題でもある。
- 3) 情感における世界との繋がり的问题。想像における情感的反応が世界へのすでに確立された反応と見なすか、その反応をも含めて情感に自由を認めるかどうか、また、こうした二種類の態度を認めるならばそれらをどのように関連づけるかという問題である。知覚においても情感的反応が存するとするサルトルの前提を考慮すれば、情感という点での知覚と想像の対比も問題となるであろう。

2)と3)については、サルトルの強調していた知覚と想像の差異を尊重しながらも、構造上の親近性を探ることが課題であると思われる。これらはいずれもサルトルが『想像的なもの』の第三部、第四部で扱っている問題であるとともに、現象学的方法によるのではないとはいえ、現在の脳

科学などにおいて追究されている事柄でもある<sup>28</sup>。

- 4) 物的想像と心的想像を全体として考察するという方向性。たとえば、トンプソンは、フッサールの指摘した「像物体」・「像客体」・「像主題」という「像意識」の三契機<sup>29</sup>に関連して、「像の心的理解の意味での想像は絵画的経験に必要な構成要素なのである」<sup>30</sup>と言っている。サルトルの分析を振り返れば、心的アナログンという名のもとで扱った「心的想像」の諸契機は「物的想像」においても働いていると考えられる<sup>31</sup>。すでにみたように、「心的想像」の契機として考えられた運動感覚と情感の働きはすでに、同書第一部における「物的想像」の現象学的分析においても認められていたからである。

以上が本稿の結論であるが、関連して以下の課題が浮かび上がってくる。

- 1) に関連して、心的アナログンなどの「前反省的・非措定的」な与えられ方は、さまざまな志

<sup>28</sup> 脳科学に関連した現在の研究動向で確認できたものは以下の通りである。

1) 運動とイメージ(視覚的イメージではないが)の関連についての研究動向としては、たとえば内藤他(2013)が参考になる。それによると、「運動を伴わない(運動の)イメージトレーニングでも運動トレーニングで観察されるのと同等の第一次運動野の可塑的变化を起こさせる」ことが示され、「初期の運動学習を促進することができる」(2頁)。また、「視覚イメージや聴覚イメージはそれぞれの期待される感覚の心的エミュレーション(心的感覚的模倣)である」(5頁)という考えのもとでの実験もおこなわれている。また、イメージ(想像)における実際の運動の制御についても研究されている。Joel Pearsonほかの報告(2015)によっても、次のように、心的イメージと知覚的イメージの関連が探られていることがわかる。「脳画像化の研究は、心的イメージと知覚的イメージの神経的呈示は相互に第一次視覚皮質という早い段階で相互に類似していることを示した。V1野における活動パターンは心的イメージと知覚的イメージを低レベルの描写的視的特徴の共通の組みを経由してコード化する」(p. 590)。

2) 感情(情動)と身体の研究動向の概観としては、「情動を生み出す脳神経基盤と自律神経機能」という題名の梅田(2019)が役立つ。そこでは、「外界で生じている状況の認識と、そのときに生じている身体の変化の認識を同時に経験することが、主観的感情体験である」というA・ダマシオの考えが研究の基本的構図とされている。

<sup>29</sup> フッサールの「像意識」については、Husserl(1980)に依拠した小熊(2013)および小熊(2018)を参照。

<sup>30</sup> Thompson(2007), p. 289.

<sup>31</sup> この点は谷口(1997)も認めていたところである。

向作用やその内実に関する事柄であり、サルトルがそれをどのように扱ったのか(初期の著作や『存在と無』において)を、広く現象学全体を視野に入れて考察する必要がある。そのさい最後にみた「内的時間意識」という与えられ方を考慮する必要がある。

2)と3)に関連して言えば、サルトルは想像と知覚を峻別したが、構造上の両者の関連、また想像と身体との関連は、サルトルが実質的に踏み込んだ重要な問題領域であると考えられる。サルトルの洞察を活かしながらこの領域をさらに考察する必要がある。

4)に関連して、「心的想像」と「物的想像」(フッサールの言葉で言えば「想像」と「画像意識」)についてのサルトルの統合的な着想は、「想像」の考察にも「画像意識」の考察にも有益であると考えられる。本稿筆者は、サルトルの着想をこれらについての今後の考察に活かしていきたい。

1)と4)に関連して、本稿で主題になった事柄についてのフッサールとサルトルの見解を対比する作業が必要となるであろう。

## 参考文献

- Sartre, Jean-Paul (2019) , *L'Imagination*, PUF.  
「想像力」『哲学論文集』所収, 平井啓之訳, 人文書院, 1957。
- Sartre, Jean-Paul (2005) , *L'Imaginaire*, Gallimard, Folio, (1940, 1<sup>er</sup> éd.) .  
*The Imaginary*, translated by Jonathan Webber, 2004.  
*Das Imaginäre*, Deutsch von Hans Schöneberg, Rowohlt, 1994.  
『イマジネール』, 澤田直, 水野浩二訳, 講談社学術文庫, 2020。
- Sartre, Jean-Paul (1943) , *L'Être et Le Néant*, Gallimard.  
『存在と無』, 松波信三郎訳, 人文書院, 1956。
- Casey, Edward S. (1980), *Sartre on Imagination*, in: *The Philosophy of Jean-Paul Sartre*, ed. by P. A. Schilpp, Southern Illinois University.
- Hopkins, Robert (2011) , *Imagination and Affective Response*, in: *Reading Sartre* , ed. by Jonathan Webber, Routledge.
- Husserl, Edmund (1966) , *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)* , Husserliana Band X, Nijhoff.
- Husserl, Edmund (1976) , *Ideen zu Einer Reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie Erstes Buch*, Husserliana Band III, 1, Nijhoff.
- Husserl, Edmund (1980) , *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung (1898-1925)* , Husserliana Band XXIII, Nijhoff.
- Morgan, Kathryn Pauly (1974) , *A Critical Analysis of Sartre's Theory of Imagination*, Journal of the British Society for Phenomenology, Vol. 5, No. 1, January.
- Pearsson, Joel et. al. (2015) , *Mental Imagery: Functional Mechanismus and Clinical*

*Applications*, Trends in Cognitive Sciences,  
October 2015, vol. 19, No.10.

(<http://dx.doi.org/10.1016/j.tics.2015.08.003>)

- Smith, Quentin (1977) , *Sartre and the Matter of Mental Images*, Journal of the British Society for Phenomenology, Vol. 8. No. 2, May.
- Thompson, Evan (2007) , *Mind in Life*, Harvard.
- 梅田聡 (2019) 「情動を生み出す脳神経基盤と自律神経機能」, 『自律神経』 56巻 2号。
- 小熊正久(2013)「中立性変様とその諸形態」, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』 第10号。
- 小熊正久 (2018) 「フッサール現象学における想像と画像意識の分析」, 『思索』 第51号。
- 谷口佳津宏 (1997) 「サルトルの想像力論におけるアナログンの概念について」, 日本現象学会編『現象学年報』 Vol. 13。
- 内藤栄一他 (2013) 「運動イメージによる脳内機構—リハビリテーションへの応用を目指して—」, 『脳科学とリハビリテーション』 Vol. 13。

## On the Matter of Mental Images in Sartre's Theory of Imagination

OGUMA Masahisa  
(Professor Emeritus)

Sartre analyzed physical images (i. e. viewing pictures etc.) and mental images (i. e. phantasies) in his "L'Imaginaire". According to Sartre's Analysis, matters of physical images are things and matters of mental images are kinaesthetic sensations of bodily movements and affectivity. In this paper, Sartre's theory of the matter (analogon) of mental images is examined.

This paper consists of four sections: The first section concerns the "illusion of immanence" concerning images and characteristics of imagination, and the second section will analyse the characteristics of physical images, the third section concerns the characteristics of mental images and the roles of kinaesthetic sensations and affectivity, while the final section will describe the problems concerning the mode of being that has the matter (analogon) of mental images.

It is concluded that the matter of mental images should not be an "object" of reflection, but regarded as a given in a non-positional [non-object-directed or intransitive] consciousness of itself. All these points considered, there are many points which can be approved of Sartre's theory of imagination, however there remain some problems which we should consider further.